

風景の教え

環境の思考の原風景

村 瀬 鋼

1. 風景という問題

私、の視点から環境を眺めてみたい。その私とは、いまこれを書いているこの私のことでもあるが、環境のことを考えようとしている一々の私のことでもある。環境を繞る議論は多岐にわたる。それは当然とも言えよう。一般に環境とは私たちを取り巻くもののことであるが、私たちにとっては殆ど一切のものが私たちを取り巻くものであるのだから。だが、多種多様な議論のさなかで、私たちは時折、自分がいったい何をやっているのか、何のために何を考えようとしているのかを、見失うことがある。だからこそ、起りうるこの自失状態のなかで、できれば私たちの思考をあらためて方向づけるために、私はここで、環境のことを考える一つの私にとって、環境というものが知られ、それが問題になってくる、その基本的な仕方を確かめてみたいのである。

私からの環境の眺めは風景である。だから私は、この試みを、風景の在り方を調べていくことを通じて行なおうと思う¹⁾。たしかに、環境それ自身は風景ではない。風景は基本的にはただ眺められるだけのものがあるが、環境はただ眺められるだけでは済まないし、普通の意味では眺められはしないものをも重要な要素として含んでいる。目の前の美しい湖水には知覚しがたい有害な科学物質が潜み、手元にある美味な食物の背後には、それがここに届くまでの私のよく知らない幾多の過程があり、私の社会的環境を構成する眼には見えない諸制度というものもある。けれども、そうした諸要素にせよ、私に現われている風景のなかで何らかの仕方で私に出会われるのでなければならず、推定的な仕方であれ、象徴的な仕方であれ、風景に潜むものとして風景のなかに何らかの場所を持つのでなければならない。むしろ私たちは、ただ眺められるだけ

ではないものや普通には眺められはしないものが持っている意味を最終的に理解するためにも、まずは眺めそのものから出発する必要があるのではないか。

環境、という言葉を聞くと、ひとは多くの場合、緑なす山野や汚れた浜辺など、何らかの風景を自ずと思ひ浮かべる。それは或る意味では素朴にすぎる感性だとも言えるが、それは正しい素朴さだと私は思う。私たちは風景の教えを学びなおさなくてはならないのである。

以下のように論を進める。まず私は、必ずしも環境を意味しない、風景の風景としての純粹な在り方を吟味することで、風景が私の生と深い絆を取り結んでいるその第一次的な仕方を提示してみたい。次いで、風景がまさに環境の現われとして見て取られる仕儀について論じながら、そこで見て取られた環境というものの私にとっての基本的な含意を明らかにしてみようと思う。そして最後に、私に与えられた環境の現われとしての風景が、環境についての私の思考に或る基本的な動機づけを与えているその様子を確認してみたい。この最後の作業は、言わば環境の思考の原風景を透視する作業でもある。

2. 現われの現在としての風景

風景とは、私を取り巻くものの私への現われのことである、ととりあえず言うてみることができる。だが、ここで言う、私、とは何か。取り巻くものはいったい何を取り巻いているのか。それはさしあたり、自分の身体のところにいる私、身体としての私をであろう。取り巻くものは、この身体の外、この身体の周りに、この身体を中心に置いて配置されていて、そこから身体のところにいる私に向かって現われてきているわけである²⁾。ここで考えられているのは、さしあたり物同士の関係であると言ってよいだろう。身体という物があり、この物の周りに別の物がないしは別の諸々の物がある。この水準で考えるかぎりでは、風景において私と私を取り巻くものとの関係は互いに外的な関係になっている。

だが、風景は物ではない。それは物の現われではありうるが、それ自身は物ではなく、現われである。そして現われという水準で考えるならば、私と私と取り巻く現われとの関係は、互いに外的な関係ではない。身体という物と、その物の彼方にある林檎という一個の物とであれば、

両者は別箇のものである。だが、感じる者としての、つまり心としての私と、感じられたものとしての林檎の赤さとであれば、両者は一つの現われにおいて一緒になっている。二つの物としての身体と林檎との間には距離があっても、心としての私と現われとしての林檎との間には距離はなく、言わば私は、自分の感じているそれをじかに感じている。実際、私は林檎の赤さを、自分の身体の側にではなく、まさに現象しているその赤さそのものところで感じており、そこで感じられているものにこそ、それを感じているかぎりでの私の生の現実性の全てがあるのだから。

生きている私の心を身体のなかに閉じ込めて済ませてしまう支配的な思考習慣は一度疑ってみる必要がある。ベルクソンの言う通り、「私たちは星々にまで達する」。それは、「私たち各人の身体は、それを画する明確な輪郭で留められているのに、私たちは、知覚の能力によって、特には見る能力によって、身体の遥か彼方にまで広がっている」からである³⁾。

こうして風景は、そのあるがままの現われ、そのあるがままの情感において、私の生の成分となり、私の生の或る現実性を構成している。だが、そう言ってみたとしても、たかが感じられるだけのもの、実際には殆ど眺められるだけであるような風景が、私の生にとっていったいどれほどの意味を持つのだろうか。色彩その他の感覚的質が私の心に及ぼす深甚な影響についての心理学その他の知見を援用することもできないではない。だが、それ以前に、風景の本質的な内実のみから言えることがある。それは、風景は現われとして基本的に現在のもの、しかも際立った仕方であるものであり、このことを通じて私に私自身の現在を鮮明に教えるものである、ということである。

風景は、基本的にはいつも、それが現われているその現在のものである。そして風景が現在である仕方は、基本的にはいつも、或る全体的な仕方である。風景は、額縁内に画された絵画としてではなく私がそのうちに入り込んで生きているかぎりでは、一つの全体、その外部を欠いた真の全体である。風景には、それを外部から画する壁のようなものはない。むしろ、壁のなかの風景といったものはある。だが、もしそれが壁のなかの風景として経験されているのなら、そう経験される以上は、壁の外にあるものが、たとえ推定的ないし想像上の何かとしてであれ、それに相応しい不確定性のままに私に感じられているのであり、まさにそ

のことによって、壁の外もその風景の成分となっている。そこでは壁の外部に感じられる一切をも含んだ全体こそが、私の現に経験している風景である。逆に、たとえば箱庭や絵画などの限定された風景のなかに、その風景の枠付けを忘れて没入するようなときにも、客観的に他から見てどうであろうと、私の経験そのものの在り方、私に経験されているかぎりでの風景の在り方は、やはり同様に全体的である。また、風景のなかの遠近を手前の方に、つまり私の身体の場所の方に引いてくるなら、ここにも風景の限界はない。私の身体も、その内部に半ば曖昧に定位されている私の感情や思考とともに、まさに風景の中心に位置するものとして風景に包まれており、風景の一部なのである。

このような全体であることによって、風景は際立った仕方でも現在のものではない。風景の一角にある私の身体なら、私はそれを、通時的に同一であるものとして動かしていけるし、私の思考や感情も、大抵は、過去から未来へわたって繰り返し反復されうるものとして受け取られ組織されている。また周囲の諸々の物も、同一のものそのまま別の場所、別のときへと移動可能なものとして了解されている。しかし、全体的なものとしての風景は、同じものとしてどこに持ち運ぶこともできず、ただそのときにだけ存在し、ときとともにただ変貌する。風景を写真に撮って持ち運ぼうとしても、その写真に見られる風景は、その写真を眺める現在に含まれた、持ち運びの過程についての私の記憶や、写真の枠外に見えてしまっているものやのせいで、厳密に経験される風景としては別のものに変質してしまっている。実際、写真を見る私は、その写真の絵がそのときの経験そのものではないことをよく知ってもいる。ただだからこそ、私たちは、二度とはないその瞬間への愛惜とともに、写真などを通じてその瞬間の不可能な反復を試みもするのである。

その全体的現実性における風景は、私の手に余るどうしようもないもののだとも言える。それは儂いものであるとともに不壊のものでもある。私は自分の意志と思考とを働かせ、身体を動かし、諸々の物に働きかけて、様々なことをどうにかして行く。だがこのどうにかして行くことは、風景の現在に対しては、根本的なところでは指一本触れることもできない。なぜなら私は、何をしようと、また何をすまいと、そこで次の新たな現在の、既に何がしか変貌したもう一つの風景に出会うだけなのだから。だからこそまた、一つの風景は二度とはないかけがえのないもので

もあり、そのようなものとして、かけがえのない私の現在を構成するのである。

村上春樹は、「使いみちのない風景」という言い方を通じて、風景のこうした本質に触れているように思われる⁴⁾。村上は次のように述べている。旅の途中、一度だけ不意に現われ、私たちに強い印象を残す風景というものがある。それは例えば或る動物園で見た「アリクイの夫婦」であり、移動中の船上で見た「水兵の目」である。それは私たちを強く惹きつけ、記憶に深く刻み込まれ、それが現われたときと同様に「まったく唐突に、ほとんど身勝手に」蘇ってくるが、その思い出が私たちに「何かの結論なり、教訓なり、特定の感情なり」をもたらずわけではない。「僕はただこう思うのだ、《あそこにはアリクイの夫婦がいたなあ》と。ただそれだけだ」。そこにあるのは「どこにも結びついていない」「ただの風景の断片」だけ、何の実践にも役立たない、それ自身に尽きてしまうどうしようもない風景である。そこから「何も始まらない」し、「それは何も語りかけない」。それはいわば「使いみちのない風景」である。だがそれは、「写真」では保存不可能な「そこでしか見ることのできない」風景として私たちの心に深く残る。村上は、このような風景に、私たち個々の生との間の深い絆を予感している。写真の風景からは「何か大事なものが決定的に失われている」のは、「人生においてもっとも素晴らしいもの」は「過ぎ去って、もう二度と戻ってくることのないもの」だからである。使いみちのない風景は、生の「もっとも素晴らしいもの」に似たものだ。

「使いみちのない風景」の具体的経験が、その場そのときかぎりのものとしての風景の性格が際立つ旅の途中のものであったように、風景はまた、未来が無化されて現在のかげがえなさが際立つような状況において特に輝く。それは例えば私が死を前にしたとき、自分の未来の可能性を断念したようなときである。よく知られた数々の美しい風景画を後に描くことになった東山魁夷が風景に目覚めた一瞬も、またそんなとき、第二次大戦終戦間近の軍隊経験のなかでのことだった。東山はそのときのことを思い返してこんなふうに述べている⁵⁾。「私は見たのだ、輝く生命の姿を。 / 熊本城からの眺めは、肥後平野や丘陵の彼方に、遠く阿蘇が霞む広闊な眺望である。雄大な風景ではあるが、いつも旅をしていた私には、特に珍しい眺めというわけでもない。なぜ、今日、私は

涙が落ちそうになるほど感動したのだろう。なぜ、あんなにも空が遠く澄んで、連なる山並みが落ちついた威厳に充ち、平野の緑は生き生きと輝き、森の樹々が充実した、ただずまいを示したのだろう。今まで旅から旅をしてきたのに、こんなにも美しい風景を見たであろうか。おそらく、平凡な風景として見過ごしてきたのにちがいない。これをなぜ描かなかったのであろうか。いまはもう絵を描くという望みもおろか、生きる希望も無くなったと云うのに　　歡喜と悔恨がこみ上げてきた。/あの風景が輝いて見えたのは、私に絵を描く望みも、生きる望みも無くなったからである。私の心が、この上もなく純粹になっていたからである。死を身近に、はっきりと意識する時に、生の姿が強く心に映ったのにちがいない。』

風景とは、全体的な現われとしてのその純粋な在り方において、このような「生の輝き」⁶⁾ そのものである。厳密な語源学ではないが、風景、という言葉は、風景のこうした本質に相応しい言葉だとも言える。風と景、すなわち風と光とは、私たちにそれらが現象する仕方においては、同一なまま保存され続けるいかなる物でもなく、それが吹きそれが輝くその瞬間に、私の生の全体を波立たせ染め抜くその動きその輝きのままに、それが吹きそれが輝くかぎりだけで存在し、当のそのものとしてはその一瞬をもって尽き、変貌する、そのような何かだからである。

3. 風景の私性

風景は、このようにして私の現在を、私のいま在ることを、或いはむしろ、在るとは基本的にはいま在ることにほかならないのだから、端的に私の在ることを、構成する。ところでそれは、私の在ることをたんに豊富な色彩で彩る、といったことに尽きるのではない。風景は、私の在ることに、つまり私の私であることに深く関わっている。

村上は「使いみちのない風景」について語りながらそのことをたぶん予感している。彼は言う、「たぶん僕らはそこに自分のための風景を見つけようとしているのだ」と。自分のための、自分だけのための、自分のためだけの風景。それは、自分が生きることを余儀なくされている風景であり、自分がそれを生きるということだけにその意味が尽きてしまいうような風景である。風景は、その無二のかけがえのなさによって、

他にとって代われえぬ私のただ一つの生を、そのただ一つの生を生きるかけがえのない者としての私の存在を、私に教えるのではないだろうか。私は、「私」と発語しうるあらゆる者たちと交換可能な存在として生活していく定めにある。その仕儀については改めて考える必要があるだろう。が、私の「私であること」は、たんなる言語の使用規則以上のものからその意味内実を獲ているのでなければならない。その内実は、無二のこの現在を生きている唯一の者というところにこそあるだろう。

森有正は、経験が私を定義するということを様々な変奏で繰り返し述べているが、これはまさに上記の事態に関わる事柄だと思われる。

森は例えば次のように言う。「経験というものが私自身の意味である。(…)。ある一人の人間ということと、ある一つの経験ということとは全く同じことであり、そのある一つの経験というものは、一人の人間というものを定義するもので、それ以外に人間というものは考えられない」⁷⁾。「経験」とは、私に与えられ私に感受される一切のもののことであるが、たんに蓄積された過去の体験の総体ではなく、「不断の変貌そのものとしていつも現在」であるもの、「私にあたえられた現実そのもの」のことである⁸⁾。「経験」は「体験」からは区別される。「体験」とは、私が明確な意味づけのもとに「自分の道具として使用でき」、一般的なものとして他人にも提示可能な、部分的な蓄積物である。これに対してただ一つの全体としての経験は、「利用すること」ができない

言わば使いみちのないもの、「対象化すること」も「予測すること」もできず、「直接的提示」も不可能であるもの、つまりはただ私に現に生きられるしかないものである⁹⁾。これが私を定義するのは、それが「唯一つしかない」(強調は森)から、「一人一人が自分の経験を持っていて、その経験はほかの人の経験と置きかえることができない」から、「この『経験』では誰も私に代わりえない」からである¹⁰⁾。それは「一人一人の人間が自己であり、外の何人とも置き換えることが不可能だ」ということの根源¹¹⁾なのである。そうしたものとして、「経験」は、予め存在していた私の生をたんに豊かにするだけの「体験」とは違って、私の在ることそのことをつくる。「体験」では「いつも私がすでに存在している」のであり、私は《体験》に先行し、またそれを吸収する」のに対して、「経験」では「『わたくし』がその中から生れて来る」のであ

る¹²⁾。

ところで、森がこの「経験」を具体的に記述するのは、大抵は風景の経験としてである。例えば、森は「支笏湖畔の原生林が高緯度の冷たい夏の太陽の光を浴びて燦めく中を歩きながら」、「人間がつくった名前と命題とに邪魔されずに、自然そのものが裸で感覚の中に入ってくるよるこび」、或いはむしろ「《よるこび》以前の純粹状態」を経験し、そこに「自分」の存在を感じる¹³⁾。「私は幸福であった。顧みて私はそれを自分の経験として完全に肯定することができる、というよりもむしろ、この純一な経験によって自分というものを知る。あるいは自分が生まれさえもするのを感じるのである」。或いはまた、南仏を旅行中の或る晩、乗っていたモビレットが故障して文字通りどうしようもなくなった森は、乗物を路傍に置いて村外れの草原に仰向けになる。「目を開いた瞬間の感動を何に譬えたらよいだろうか。そこには無数の星辰の燦めく南国の空が、ほとんど手がとどきそうに、低く、ひろがっていた。こんな美しい星空を僕は何年見たことがなかったのだろうか」。この星空の下で、森は、渦巻く様々な想念の基底に、あるがままの自己の存在を見出す。「僕の存在、それが醒めていながら、このように裸で息づいているのを、僕は今まで経験したことがなかった」¹⁴⁾。「経験」が風景において生きられるのは偶然ではない。風景の現在は、経験の「唯一つしかない」ことの際立った経験である。だからそれは、私のいまここに在ることを、その在り方の具体相とともに鋭く覚醒させる。そこでは風景はまさに私を「定義する」と言うこともできるかもしれない。

以上、私たちは、純粹な現われとしての風景が私の生ということの基本的な内実を構成している仕儀を見てきた。しかし、風景は純粹に現われであるには尽きず、物の現われとしての性格をも持っており、そうした物の現われを通じて現われている物を知る、ということが、私にとって、環境を知ることをも意味している。知られるこの環境に対応する私は、たんに現在において心として無為に現われを享受しているだけの私ではなく、文字通り身をもって諸々の物と関わりあい、未来に向けて何かを為していく私である。

村上春樹は、「使いみちのない風景」の対比項として、私たちの継続的な生活のなかで馴染まれていく日常の風景　彼の言い方では「クロノロジカルな風景」　についても述べていた¹⁵⁾。それはたんに現われ

として享受されるだけの風景ではない。「我々はそれらの風景と現実的に折り合いをつけなくてはならない。それらの風景に対して、我々はそれなりの判断を下さなくてはならない。我々は何を取り、何を捨てるか、何を受け入れ、何を受け入れないか、というようなことをきちんと決断しなくてはならない」。そこには「ある種の現実的責任のようなもの」があり、そのために私たちは「その風景の奥にあるものを、解析し、引き受けて」いく必要がある。それは例えば、ただ瀟洒な家に滞在して海辺の風景を楽しむというだけでなく、私たちの家を破壊するかもしれない「嵐や津波」を予想するということであり、「排水管」の故障を気にかけ、「泥棒」の心配をするというようなことである。

私たちは、風景のこうした局面について、次に考えてみなければならぬ。先取りして言うなら、物が見て取られることは、同時にまた、者が、つまりは他者が見て取られることでもある。純粹な現われとしての風景は、或る意味で最も私的な、或いは私秘的なものであり、また孤独なものでもある。森は「経験」について言う、「経験は、その本質上、孤独な個人をつくり出す」と¹⁶。この孤独は根本的なものである。一切の経験、むしろ一切であるところの経験は、或る最終的な意味で、まるごと全部、ただ私の生ということ、私の在るということをしき意味しないのだから。そこで問題になる価値は、最終的には美的なそれに帰着するだろう。孤独な私の生は、ただ美しいものとして肯定されることだけが問題になるような何かだからである。しかし、風景のなかへの他者の出現は、私をたんに孤独であるだけにはしておかず、私の風景に勝れて倫理的な意味あいを付け加えることにもなるだろう。

4. 風景に見出された環境

環境は、たんなる現われではない物の世界であり、私に言わばじかに与えられる現われとは違って、諸々の物が私からも相互の間でも基本的には距離を置いて散在する体裁で見出される世界である。現われとしての風景が心としての私の相関者であるとすれば、諸物とその配置としての環境は身体としての私の相関者である¹⁷。

私が風景に見出す物は、私の身体と全き対をなしている。目の前の一個の林檎は、私が手で掴める林檎、また私の身体に接触して皮膚を押し

うる林檎である。このとき、私の身体は、林檎と鬮ぎあいうる固さをもったものとして林檎と同じような或る物であり、林檎の方も、それ自身の表面のうちの一つの内部を囲い込んでいるものとして私の身体と似たものである。風景のなかのここに自己の身体を見出すその同種の私の視線こそが、風景のなかのあそこに物をもまた見出すのであり、またその逆でもあって、そこでは身体と物とは同じ一つの風景の組織化において互いの全き相関者になっているのである。身体と林檎との間の距離は、両者がそれぞれの運動によって相手に接近しうるその道りを示している。身体と林檎とは、それぞれともに、一つのものとして運動しうるもの、その運動の末に相手との接触において相手との相互的な作用関係に入りうるものとして、風景の空間のなかに配置されているのである。むろん環境内には林檎のような粗大な固体ではないもの、気体や液体や微細なものがあるが、それらのものも、無抵抗な媒体として単に無視されているのでなければ、私の身体との相関関係においてそれなりの仕方でも物として、風景の空間内にその場所を画しうるものとして私に理解されていると言える。

こうして風景は、同数の一つのものとして運動しうる可能的作用の基底である諸物を星々にした一つの星座として、そのなかの特別な星である私の身体を中心に置いて組織立てられており、このことで風景はまさに環境の現われとなっている。そこでは現われということも、物の論理に従って解釈される。私は、林檎のところに、じかに赤を見ているのだが、身体のあるここから、距離を隔てて、眼によって見ているのもあり、赤は、林檎のところに見えているのだが、林檎のあるあそこから、距離を隔てて、身体のあるここへと現われているのである。それはあたかも、眼から発した視線、或いは林檎から発した光線が、距離をわたって相手のところに到達し、そこでの接触によって現実の風景を実現したかのようなのである。そしてこの現実の風景は、身体と林檎との双方が持つ諸々の可能性のうちの一つのものの実現にすぎない。それは、身体と林檎とは、双方の運動によって互いの位置関係を変化させうるからであり、また身体は、たんに視覚のみではなくて触覚その他の能力によって、いまはまだ可能的でしかない諸々の現われを林檎から獲得しうるからである。

こうした環境の現われとしての風景が、総じて可能性が可能性として

のままに固有の現実性を得ている世界であることに注意を促したい。見えている物は、その可能な運動と、その運動の現実化とともに実現されることになる可能な諸々の現われとを、一つのものとして見えているその姿そのもののなかに含蓄しており、私はそうした可能性をたんに可能性としてのかぎりでのその姿のうちに現に見て取っている。また私の身体は、その持つ運動と感覚との能力との可能的な展開をその能力自身のなかに保持しているもの、この展開を通じて諸物とまだ可能的な多様な関係を実現しうるものとして、私の手にされている。純粋な現われとしての風景はもっぱら現在のものであるが、風景に現われる環境は、未来の現実的な可能性が読み取られる世界、その可能性の或るものが現に実現されもする世界、従ってまた、諸々のものが各々一つの同じものとしてそれ自身の歴史を紡いでいきうる世界として知られるのである。

私に環境というものがまず現われてくるその基本的な仕方はおよそ以上のようなものである。ならば、そこに現われている環境が私にとって問題になる仕方とはいったいどのようなものであるのか。私の生の実質が現われとしての風景にあり、そこでは美的価値こそが基本的な価値である以上、環境は、何らかの美を実現するための手段としてこそ私にとって意味を持つのであるように思われる。いっそう多くの特別な美の瞬間とそれらへの待機の期間における安定した快の維持とを含んだ美的経験の歴史として自らの時間を組織していくこと、これに向けて環境との適切な関係を取り結んでいくこと、私にとっての気がかりはただそれだけなのではあるまいか。それは利己的で自閉的な生であるのかも知れないが、もしそれが生自身の要求するものであるとすれば、これは善悪を超えて肯定されざるをえないことであろう。　だが、果してただそれだけなのか。

改めて考えてみよう。風景に見出される物は、私の身体の全き相関者なのであった。ところで、身体とはたんなる物ではない。それは、心を宿した物であり、私の生の全体がそこから展開される、諸作用の中心核そのものである。だから、風景に見出される物も、こうした身体の全き相関者として、やはり何らかの心を宿したものとしてこそ、物としてもまた見出される。物はまた者でもあるのだ。実は、風景の現実性のなかへの可能性の宿りそのことが、既に「可能的世界」としての他者の存在を告げてもいた¹⁸⁾。私にとって可能的なもの、例えば眼の前の林檎の私

には顕在化していない後ろ姿は、ありうる何らかの他者の見る世界には顕在化しているであろう姿でもあろうからだ。そしてそのような他者は、私の身体と同様の個々の物のなかに位置づけられてこそ現実的な他者として私にとって在るが、実は私の身体と多少とも類似したあらゆる物が、少なくとも潜在的にそのような他者なのである。だから、私の環境世界は基本的に言わばアニミズムの世界である。アニミズムとは、たんに迷信めいた或る特殊な思考習慣に尽きるものではない。それは私にとって世界があるその最も基本的な仕方なのである。もしこうした或る原初的なアニミズムがあるのでなかったら、たかだか私の身体と細部の構造にわたってきわめて類似しているというだけの或る物に私が他の人間を現に認めているというこの事実も、決してありえないことだったはずである。

このような「アニミズム世界」の風景を、岩田慶治は「アニミズム」という言葉の坐りの悪さを認めつつよく描き出している。

岩田は「私は風景なのである」と言う¹⁹⁾。「私という存在は、その時、そのところにおいて私の眼に映った風景以外の何ものでもない」。一個の身体のうち私を閉じ込めるのは適切ではない。「われわれは普通、私というものをその身体性において理解している。しかし、実際にはそれは身体の輪郭を超えて、あるひろがりをもった空間を含むものでなければならない²⁰⁾。「私たちは(...)風景のなかの『ひと』だけをとりだして、これが『ひと』なんだ、残りは『ひと』の居る場所には違いないが『ひと』とは違うんだ、と考えることが多い。しかし(...)『ひと』が活着しているから『ひと』なので、生きることのできる『ひと』と環境、その『ひと』と自然の全体を考えなければいけない(...)。風景のなかの『ひと』、『ひと』を含む風景(...)」²¹⁾。このように言われるのは、まずは、先に見た純粋な現われとしての風景の本質によるものと言えるが、ただそれだけのことではない。またそれは、私がそこに否応なく巻き込まれている生態系の存在のことをたんに意味しているのではない(岩田は、私たちと自然との基本的な関係を、客観的な生態系において以前に風景において考えるべきことを各所で強調している²²⁾)。岩田の諸々の記述内容を幾分素っ気なく要約するなら、身体としての私は、風景に現われる環境の全体を「地」にして浮かび上がった「柄」であり、そのようなものとしてこの環境に帰属している。私はこの「地」を自ら

の生の場所とも死の場所ともしている。死とは、基本的には、「柄」である身体が「地」に溶解して消滅することを意味しているからである。ところで、風景のなかの諸物は、私の身体と呼応するものとして、やはり同様に、この「地」の上の同数の「柄」として浮かび上がっている。だから身体に定位する私と諸物とは、同じ「地」に生き死にする者たち、風景に現われた同じ一つの環境に共属しながらそれぞれに風景を生きる心ある者として、私に現出している。環境の現われとしての風景を見ることは、実は、こうした無数の者たちの風景をも込めて風景を眺めることなのだ。「西山が遠くにあつて、近くに市街地がひろがり、その手前に街路樹がならんで、そこで木の葉がゆれている。ノこっちからあの木を見ると、それだけしか見えないが、しかし向こうからもこっちを見ているのではないだろうか。(…)見るということは一方向的ではない。こっちからも見る。向こうからも見る。四方八方から見る。そのうえで、《我》と《汝》との関係を確かめる。ノ風景が見えるのも、実はそのような手続きをへて見えてくるのです」²³。

私は風景において、風景のなかの諸物のなかにそれらの生を認め、それらのもののなかに或る仕方です身を置き、或る意味ではそれらのものに成りさえする。「木を見る。そうすると木がこちらを見る。こちらに向かって歩いてくる。木が人になり、人が木になる」²⁴。「木」や「鳥」や「猫」によって眺められている風景を幻視する岩田の数々の魅力的な描写²⁵を多く引用できないのが残念だが、疏水に流れる「落葉」との彼の対話を僅かに引いてみたい。「落葉の流れ、それをじっと見つめているうちに自分と落葉との関係を考えはじめた。落葉は自分とは無関係なのか。それとも大いに関係があるのか。ひょっとしたら、自分も落葉と歩調をあわせて川を下っているのではないか。その途中はとにかくとして流れて行き着く先は同じではないか。(…)いくら見つめていてもわたしはその一枚の葉と一体になれない。(…)落葉は落葉、わたしはわたし。(…)だが、ひょっとするとわたしはもう落葉なのかもしれない。わたしがすでに落葉だったとしても、何ひとつ不都合なことはない。ゆったりと水に浮かんで行くべきところに行くだけだ。ノ落葉が落葉である前はわたしで、わたしがわたしである前は落葉だった。そうかもしれない。(…)わたしは一枚の落葉。そうなってみると、一枚の落葉が無数の落葉になる。わたしはそのままで無数の落葉になって流れている。

いや、流れる前にそこにわたしという存在をすべりこませてよい。そうすれば、わたしは一本の木、わたしは森」²⁶)。私が風景であるというのは、たんに私の生が孤独に風景を享受しているからというだけではなく、私の生が、風景のなかの無数のものたちの無数の生を自らの分身のように随伴させているから、風景に孕まれたこれら無数の生が、現実そこに生きられている同数の私の可能的な生として、私の生の奥行きをつくっているからでもあるのだ。

私にとっての環境の最初の現われ方が以上のようなものであるとすれば、環境への私の最初の気遣いとはどのようなものであるのか。そこではつねに、風景の美的価値が基本的に問題であるには違いない。「生の輝き」こそが、私にとって最終的に大切な唯一のものなのだから。しかし私にとって大切になる生とは、ただ私の生だけ、私だけの生ではない。私は同じ一つの環境のなかに、それぞれの固有の生を持ちこの環境に風景を生きる諸々の者たちをもまた見出す。むろん、身を別にする私とそれらとは、それぞれ別箇に生きかつ死ぬのであり、だからこそお互いに根本的に孤独なのでもある。けれども私は、それら各々のところに私のそれと権利上同じ価値を持つ何らかの一つの生があることを、疑う以前にすでに認めてしまっており、その生に現われているだろう風景を、この同じ環境の或るもう一つの風景として、自分自身の風景に孕まれた或る現実的な可能性として、すでに見て取ってしまっている。それは、私がそれらのものの私に及ぼしうる作用を私の生のために気遣うのと恐らく同時にでもあろうが、それに遅れてでは決してない。それらのものは、一つ一つ、私の生がそうであるのと同じく孤独なものであり、自己の生の孤独さを知る私は、それらのものの孤独さをもまた認めずにはいない。だがまた、むしろだからこそ、自らの孤独さのなかで「生の輝き」を知る私は、まさにその「輝き」ゆえに、これらの他者の生をも気かけずにはいられない。むしろ、私の生は、それらの無数の生の、私にとって最終的には潜在的なままであるほかはない輝きを随伴させていてこそ、真に美しいものとして肯定される。だから、私の未来の生の美への私の願いは、ありうる無数の他者たちの生の美への祈念でもある。但し私は、自己の生の肯定のために、それらの生の美を願うのではない。私の生死に拘らず、私の生死に拘らずに生きられるだろうそれらの生が、そのつど生きられるその現在において輝かしくあること、この私のそれにかぎ

らずあらゆる一つの生があるいたるところで、その生が輝かしくあることが、しかもまさにその一つの生自身のためにそうであることが、願われている。私とは無記でありうる他者の生、私から離れたところで生きられているだろうがままのその生それ自身が、私には或る何か、かけがえない或る何かなのである。

むしろ、この祈念の先に様々な現実的な困難が横たわっていることを私は承知している。この祈念は或る意味ではまさに祈念に終わるしかないものである。なぜなら、まず、神ではなく有限な力しか持たない私たちは、無数のものたちのなかで自分がそのどれを護ろうとすべきなのか、どれを護ろうとするのかを、困難な仕方、ときには自ら選びさえできないような仕方を選択することを強いられるからである²⁷⁾。生物と無生物、人間と非人間、身近な者たちと疎遠な者たち、現在の者たちと未来の者たち、等々。そこでは誰も、無垢な善意を誇れはしまい。そしてまた、最終的には、自他がそれぞれの生を生きて死んでいくのである以上、私たちは、最も身近なものの生すら、本当には引き受け抜くことはできない。だからそこにはいつも、或る種の 悲しみが 他人の身を兼ねたいと願いつつも果たせぬという悲しみが²⁸⁾ あるのである。しかし、私が語っているのは法外な事柄ではない。それは、他者への殊更な感情移入やたまさかの共感などより以前にすでに否応なく成立してしまっているはずの、ごく当たり前の事実である。環境が私たちの公共的空間として意味づけられ、私たちの社会的環境が間主観的な仕方、築かれ維持されていくのも、この事実を基礎にしてでしかありえない。それは純粋な祈念でしかないのではある。しかし、私たちの苦渋に満ちた選択の底には、いつも、その選択をまさに苦渋に満ちたものにすると同時にそれを最も深いところで動機づけてもいるこの純粋な祈念が存在しているのではないか。

私はごく細やかなこと、誰もが事実上そこから出発しているはずのその出発点を再確認しようとしているだけである。私は最後に、この出発点の風景、言わば環境の思考の原風景のかたちを、様々な事情から環境の問題に深く関わってもきた書き手たちの幾つかの表現のなかに透かし見ることを試みたい。

5. 環境の思考の原風景

屋久島で農業をしながら後半生を送った詩人、山尾三省は、「風景」は「出来事」であると言う。「ぼく達は、一般的にはどこかへ出掛けていっていわゆる風景を見るわけですが、風景というのは本当は単なる風景ではないんですね。風景の本質は、ぼく達の胸の内に呼び起されてくる《出来事》なんです」²⁹）。そのような山尾の著作は、細やかながら日々かけがえのない「出来事」として現われる諸々の風景の記述に満ちている。

彼の最後の著作の一つのなかに、その特に美しい一つがある。

それは、島で家族の一人との別れと、妻との小さな齟齬とを経験した数日後の、或る春の日の一場面である³⁰）。妻と生れたばかりの子供と三人で町に出た山尾は、家族が用事を済ませている暇に、独りで近くの川の川辺に赴く。「少し風があったが、その風もすでに東の風で、暖かい午後の陽差しが土手の芝生いちめんに降りそそいでいた。あたりには人影もなく、たまに車が道路を往来する程度で、物音ひとつしなかった」。山尾は土手に腰を下ろして、そこに咲く小さな花々や、魚の跳ねる川面や、対岸に見える家々やその彼方の山並みを眺める。そうしているうちに、山尾の心のなかに「存在光」という言葉が浮かび上がってくる。「新緑の噴き出した照葉樹の山々は、そのまま春の存在光であった。様々な花色に咲く山桜も、ボラの跳ねる銀色の川面も、存在の光であった。土手のあちこちに物言わず咲き静まっているスミレの花、キンボウゲの花、地しばりの花、桜草やシロツメクサの自生の花達は、ことごとくみな存在光そのものであった。/長い時間、なおもそこに腰を下ろして、僕は遠くの風景や近くの草花の姿を眺めた。それは間違いなく、世界中で一番美しい風景であり、なおかつ日常のままの風景でもあった。文明の中心地である東京や大阪からは遥かに遠く、観光名所でも景勝地でもない、ただの川筋の土手であるが、そこに僕にとってかけているものは何ひとつなかった。スミレの花が風に揺れれば、それが僕のいのちであり光であった。銀色の川面に銀色のボラが跳ねれば、それが僕のいのちであり、光であった」。ここには生の輝きが、ひたすら私のものでありながらたんに私のものであるだけではない生の輝きがある。用事を済ませた妻が

赤ん坊を抱いてやってくると、山尾は彼女を誘って一緒に風景を眺める。それは、「その時しかないその場所の、山桜の咲く風景を彼女と共に眺めたかった」から、分ちえぬこのかけがえのない生の輝きを、かけがえのない人とどうしても分かち合いたかったからである。その山尾の胸には、山尾自身にはまだ意識されていない山尾の間近な死を超えて未来に生きていくはずの赤ん坊が抱き取られている。「(...) 花色の一番濃いスミレの株のそばに、今度は三人で腰を下ろして、しばらくは眼前に広がる風景を黙って眺めた。(…) 説明することは何もなかった。僕は、(…) 赤ちゃんの暖かい体を抱いて、沖縄からアジア、アジアからアフリカへと続く、南の光の深さを黙って眺めていればよかった」。ここで感受されているのは、何ひとつ欠けているもののない風景、私の生死に拘らぬあらゆるありうる生を孕んだ、私の在ることの全体としての現在の風景である。

幸福な風景ばかりではない。若い頃、家族五人でインドに旅行した山尾は、家族から離れたカルカッタの街角で独り、「生れたばかりの小さな赤ん坊のような乞食」に出会う³¹。「その子は (...) 小枝のように痩せ細った小さな手を私の方に差し出して、それをかすかに揺り動かしながら、身はぼろ布にくるまれて仰向けに寝ているのだった。ぼろ布からはみ出した両足は、手と同じように痩せ細って弱々しく曲っており、直感的にその子の枕元まで死が近づいていることが感じられた。(…) その手に何パイサかのお金を恵んだとしても、その子が自分でそのお金を使えないことは明らかであった。(…) この子は何のために生きているのだろうか。生きてどうするのであろうか。ふとその子の目が見えた。暗闇と呼んでもいいような暗がりの中で、そればかりがやけに大きいその子の目は、まことに静かに見開かれ、私の方にはなく、天の彼方向けられていた。(…) その子の目には星が映っていた。私は空を仰いでみた。すると空にはその子の目に映っているのと同じ星があった。/ この時、私の胸を光よりも速いものが襲い、私は了解した。生きるということは、そういうことなのだという了解であった」。子供の目を通じて眺められたこの星空は、家族と坐るあの川辺の風景と地続きの風景であり、そこで私が知る生は、川辺で私が知る生と決して別のものではない。生はいつもこのようなどうしようもないもの、また孤独なものである。だが私は、私だけのものであるこの風景を通じてこそ、他者の生に

も出会うことができ、この風景にこそ、未来の生を擁護するための最初の動機を汲みもする。実際山尾は、この子供の眺める風景、山尾にとっての他者の風景を、或る一瞬の風景のなかに垣間見もしたのである。しばらくカルカッタの街角に茫然と佇んでいた山尾は、家族のことを思い出してそのもとに急ぐ。

充実した風景ばかりではない。或るとき、久し振りに都会に出た山尾は、「虚無の風景」を目にする³²⁾。東京への途次、彼が目にする人々は、周囲の風景にもそこにいる他者たちにも目を向けない「無機質な」態度と表情をした大人たちばかりである。「(...) そのビジネスステーション、ビジネスラインの中には、一人として子供達や赤ちゃんの姿が見られなかった。(...) 子供だけでなく、年寄りの姿もほとんど見ることはできなかった」。新幹線のなかでは「車外を疾走する風景は、完全に無視されていた。(...) 車内販売の人達は人間とは見なされていず、半ば以上は声を出して歩く自動販売機のようなものと見なされていた。彼女達からものを買う人がいると、今度は彼女達自身が、自ら人間ではなく半ば以上はものを売る機具であることを、その無感情な声と態度において証明して見せた」。東京に出てみると、「都心と呼ばれる千代田区、中央区、港区、新宿区などには、見る限りの風景としては子供達や老人の姿はほとんど現われず、みっしりと行き交う人々の群れと、ビルの群れがあるばかりだ(...)。そして不思議なことには、行き交う人々の誰一人としてそのことをいぶからず、その何十万人、あるいは百万単位の人々の群れの中に、子供達も老人もいないことを当然のこととして受け入れているのであった」。ここにあるのは、私たちの死後の未来の生と私たちを残して死に行く生とが欠けた風景、他者の生に、また風景そのものに盲目な者たちの風景なのかもしれない。だが、このような風景が山尾にとって空虚なものと感受されたのは、風景のなかに他者の生を感じとる或る感受性ゆえのことであり、ここにもまた、私たちの風景の基本的な在り方が認められるのである。

私たちの風景のこの基本形、環境のことを考えようとする私たちにとっての原風景、私たちのあらゆる風景が潜在的にそれ自体でもあるこの風景のかたちを、石牟礼道子ほど深くかつ端的に表現した人を私は他に知らない。「生死のあわいにあればなつかしく候 / みなみなまぼろしのえにしなり / おん身の勤行に殉ずるにあらず ひとえにわたくしの

かなしみに殉ずるにあれば 道行のえにしはまぼろしふかくして一期の
闇のなかなりし / ひともわれもいのちの臨終 かくばかりかなしきゆえ
に けむり立つ雪炎の海をゆくごとくなれど われよりふかく死なんと
する鳥の眸に遭えり / はたまたその海の割るときあらわれて 地の低
きところを這う虫に逢えるなり / この虫の死にざまに添わんとするとき
ようやくにして われもまたにんげんのいちいなりしや かかるいの
ちのごとくなればこの世とはわが世のみにて われもおん身も ひとり
のきわみの世をあいはてるべく なつかしきかな / いまひとたびにん
げんに生まるべしや 生類のみやこはいずくなりや / (...) / かりそ
めならず今生の刻をゆくに わが眸ふかき雪なりしかな³³⁾。「この世
とはわが世のみ」である。それはまるで孤独な夢、「みなみなまぼろし」
のようである。けれども、「わが世」でしかないこの風景、一切である
「わが世」のなかで、私は、生きていて死んでいく私は、私を見つめる
他者たち、生きて死んでいく他者たちに出会う、出会ってしまっている。
その他者たちとは、たんに人間とはかぎらない、自己の生を生きるあら
ゆる者たちである。「この世とはわが世のみ」である。そこに或る 悲
しみ がある。けれども、それでいて、或いはだからこそ、「われもお
ん身も」であり、「なつかしきかな」なのである。私は、かけがえがな
く逃れえぬ「今生の刻」から、ありえぬかもしれぬ「いまひとたび」を、
そして「生類のみやこ」を幻視する…。

まさにこのような風景から、私たちは始めなければならない。いや、
実は恐らく、既にそこから始めてしまっていたのである。それと気づか
ぬままに…。だからこそ、何よりもまずそれに気づくことこそが、環境
と風景との新たな変容へと私たちを導いていく、いまここでの再開とな
るにちがいない。

注

- 1) 風景論に関しては、本稿で触れる数名以外に、筆者が本稿とのその距離
関係を測るべき幾人かの主要な先達たちの論考があるが、この測定作業は
本稿では省かざるをえなかった。風景に関する筆者の基本的な考えについ
ては、本稿自身に加えて、村瀬「風景の私性 現在としての私」、『福岡
大学人文論叢』第32巻第1号、2000年6月、所収、また「共存の風景
環境の哲学に向けて」、『成城文藝』第180号、2002年11月、所収、加えて
「私 の生から眺められた環境について 風景としての生と環境のなかの

- 他者」『ヨーロッパ文化研究』第23集、2004年3月、所収、を参照。
- 2) 桑子敏雄は「風景」を「身体の配置へと全感的に出現する履歴空間の相貌」と定義している(桑子『環境の哲学』、講談社学術文庫、1999年、p 50)。
 - 3) アンリ・ベルグソン『精神のエネルギー』、白水社(ベルグソン全集5) 1992年、p 44(但し文章は原典に拠って訳し換えてある)。
 - 4) 村上春樹・稲越功一『使いみちのない風景』、中公文庫、1998年(短い文章ゆえ、以下、頁の指示は省略する)。
 - 5) 東山魁夷『風景との対話』、新潮選書、2003年、p .12 - 13。
 - 6) 同書、p .10。
 - 7) 森有正『生きることと考えること』、講談社現代新書、p 49 - 50。他に、森の同種の表現としては、森『森有正エッセー集成1』p .177、同『集成3』p 57、同『集成4』p 49、p 270、同『集成5』p 28 - 29、p 97 - 98、等々を参照(いずれも、ちくま学芸文庫、1999年)。なお、森のいう「経験」は実際には多様な成分と複雑な時間制を含むもので、決して一枚岩的なものではないが、森の思想の立ち上がった吟味を要求するその内実の分析は別稿に譲らざるをえない。
 - 8) 森『エッセー集成4』p .155、p 24。
 - 9) 森『エッセー集成3』p 51、p .71、同『集成4』p 81、『森有正全集3』p .78。
 - 10) 森『生きることと考えること』p 49、『エッセー集成3』p 32、『エッセー集成5』p .174。
 - 11) 森『森有正全集4』p 280。
 - 12) 森『経験と思想』、岩波書店、1977年、p 33。
 - 13) 森『エッセー集成5』p 54 - 55。
 - 14) 森『エッセー集成2』p .131。
 - 15) 村上、前掲書
 - 16) 森『森有正全集3』p 81。
 - 17) 以下に粗描される「物」と「他者」との成立の立ち上がった詳細に関しては、松永澄夫(編)・村瀬鋼・檜垣立哉『私というものの成立』、勁草書房、1994年、第二章、また、村瀬「知覚的世界のなかの他者たち」、『正義と幸福』(哲学雑誌第109巻第781号) 有斐閣、1994年、所収、さらに、村瀬「メーヌ・ド・ピランの抵抗の概念について」、『西日本哲学年報』第4号、1996年、所収、を参照。
 - 18) 「他者」を知覚の構造自身に含意される「可能的世界」と捉えて魅力的な論考を展開しているのはジル・ドゥルーズである。特に、ドゥルーズ「ミシェル・トゥルニエと他者なき世界」、『意味の論理学』(邦訳：宇波・岡田訳、法政大学出版会1987年) 所収、を参照。
 - 19) 岩田慶治『カミと神』、講談社学術文庫、1989年、p 246。
 - 20) 岩田『岩田慶治著作集3』、講談社、1995年、p 25。

- 21) 岩田 『死を含む風景 私のアニミズム』、NHK ブックス、p99 - 100。
- 22) 岩田 「風景学とエコロジー」、『いのちの環境』(『仏教』別冊6) 法蔵館、1991年、所収、p.120、他。
- 23) 岩田 『死を含む風景』 p.106。
- 24) 岩田 『岩田慶治著作集 8』、講談社、1995年、p.387。
- 25) 例えば、岩田 『<わたし>とは何だろう』、講談社現代新書、1996年、p.112 - 113、『岩田慶治著作集 8』、p.202、「宇宙ネコ誕生 今日のアニミズム』、『岩田慶治著作集 7』、講談社、1995年、所収、その他多数の箇所。
- 26) 岩田 『<わたし>とは何だろう』 p.66 - 68。
- 27) 「選択」の問題に関しては、前掲拙稿「共存の風景 環境の哲学に向けて」の第5節を参照。
- 28) 「かなしみ」という和語についての坂部恵の語源的解釈を参照(坂部『鏡の中の日本語』筑摩書房、1989年、p.108 - 114)。
- 29) 山尾三省『アニミズムという野望』野草社、2002年、p272。
- 30) 山尾『南の光の中で』、野草社、2002年、p.21 - 24。
- 31) 山尾『聖老人』、野草社、1988年、p.188 - 190。
- 32) 山尾『自己への旅』、聖文社、1988年、p.21 - 23。
- 33) 石牟礼道子「序詩」、『天の魚』、講談社文庫、1980年。